A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

20

トルストイ

アンナ・カレーニナ II　原　卓也訳

中央公論社

世界の文学　20　©1964

トルストイ

訳者　原　卓也

昭和39年 3 月12日初版発行
昭和44年 3 月20日17版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

アンナ・カレーニナ　Ⅱ

年譜　495

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

アンナ・カレーニナ　Ⅱ

第四編（つづき）

十七

食事の間や食後かわした会話の印象を、心ならずも記憶の中に思いおこしながら、カレーニンはホテルの寂しい部屋にかえってきた。許してやれというドリイの言葉は、心のうちに憤りをよび起こしただけだった。キリスト教の掟を自分の場合に適用するかしないかは、あまりにもむずかしい問題で、軽々しく論ずるわけにはいかなかったし、それにこの問題はもうだいぶ以前からカレーニンによって否定的な結論を出されているのだった。今日言われたすべてのことの中で、いちばん強く心に刻まれたのは、あの愚かで善良なトゥロフツィンの、『男らしく振舞いましたよ。決闘を申し込んで、殺したんですからね』という言葉だった。礼儀上、口にこそ出さなかったものの、どうやら、だれもがそれに共感しているらしかった。

『もっとも、この問題は片がついたんだから、今さら考えることは何もないんだ』カレーニンは自分自身に言った。そして、明日に迫った出発と視察の仕事のことだけを考えながら、自室に入り、ついてきたドア・ボーイに、従僕がどこにいるのか、たずねた。ボーイの話では、従僕は今しがた出て行ったばかりということだった。カレーニンはお茶を持ってくるよう言いつけて、テーブルに向かうと、フルームの旅行案内（ロシア旅行案内。鉄道汽船時刻表）をとりだし、旅行のコースを検討しはじめた。

「電報が二通まいっております」もどってきた従僕が、部屋に入りながら言った。「申しわけございません、今しがた外に出ましたばかりで」

カレーニンは電報を受けて封を開いた。一通目の電報はかねてカレーニンの望んでいた地位に、ストリョーモフが任じられたという知らせだった。カレーニンはこの至急電報を投げすてると、顔を真っ赤にして立ちあがり、部屋の中を歩きまわりはじめた。《Quos vult perdere demantat（神は、滅ぼそうと望む者の理性を奪いとる）》この任命に協力した人たちを、Quos という言葉にあてはめながら、彼は言った。腹立たしいのは、その地位に任じられたのが自分でなかったことや、明らかに自分が敬遠されたことではなかった。しかし、大言壮語ばかりしている、あんなおしゃべりのストリョーモフが、だれよりもこの地位に不向きなことに、みなが気づかなかっ

たというのが、彼には納得できなかったし、不思議だったのである。こんな任命をすれば、身の破滅を招き、自分たちの威信を台なしにすることになるのに、どうして彼らはそれに気づかなかったのだろうか！

『こっちもやっぱり、同じような類のことだろう』二通目の至急電報をひらきながら、彼は心のうちでいまいましげに言った。電報は妻からだった。青鉛筆で書かれた《アンナ》というサインが、最初に目に入った。『死の床に伏しております。おねがいです、どうかおかえりになってくださいませ。お許しいただければ、安らかに死ねます』という電文だった。彼はさげすむように薄笑いをうかべ、電報をほうりだした。こんなのが嘘っぱちの、策略にほかならぬことは、疑う余地もないと、最初の瞬間には思われた。

『どんな嘘であろうと、あの女はためらったりしないからな。あれは出産を控えてるんだ。たぶん、お産の病気だろう。それにしても、あの二人の目的はいったい何なんだ？　赤ん坊の籍を入れさせて、わたしに恥をかかせたうえ、離婚を邪魔しようという気かな』彼は思った。『しかし、なにやら書いてあったな。死の床に伏しております、か』彼は電報を読み直した。と、そこに記されたことの、そのままの意味が彼をぎくりとさせた。『もし、これが本当だったら、どうする？』彼は心に言った。

『もし、あれが死を間近にした苦しみの中で、心から悔い改めているのが本当だというのに、わたしがそれを嘘と決めてかかって、かえるのを断わったりしたら？　それじゃ冷酷なだけではなく、みなに非難されるし、わたしの立場としても愚かな振舞いになってしまうな』

「ピョートル、馬車を待たせておいてくれ。ペテルブルグにかえるから」彼は従僕に言った。

カレーニンは、ペテルブルグにかえって妻に会おうと決心した。もし病気というのが嘘だったら、ひと言も口をきかずに、出てきてしまえばよい。また、もし本当に瀕死の重病で、死ぬ前に夫に会いたいとねがっているのだったら、生きているうちにまにあえば許してもやるし、万一駆けつけるのがおそすぎた場合には、最後の務めをはたしてやればよい。

道中ずっと彼は、自分のすべきことについて、それ以上何も考えなかった。

車中で一夜をすごしたために、疲労感と、身体の汚れた感じとをいだきながら、カレーニンは、ペテルブルグの朝靄につつまれた、人気のないネフスキイ通りを馬車で行き、自分を待ち受けていることなど考えずに、ただ前方を眺めていた。彼はそれを考えることができなかった。なぜなら、きたるべきものを想像する際に、妻の死が彼の立場の苦しさをすべていっぺんに解決してくれる

という予測を、どうしても払いのけることができなかったからだ。パン屋や、表戸のとざされた商店、徹夜の辻馬車、屋敷番、歩道を掃いている人夫たちなどの姿が、目の前をちらとよぎって行った。彼は、自分を待ち受けていることや、望んではならぬとは言え、やはり心のうちで望んでいることについての思いを、かき消そうと努めながら、これらすべてのものを観察していた。馬車が表玄関に着いた。一台の辻馬車と、御者の眠りこけている箱馬車とが、表玄関に止まっていた。玄関に入りながら、カレーニンはまるで脳の奥底からひっぱりだすような気持で自分の決心を思いだし、たしかめ直した。決心とはこうだった。『もし嘘だったら、冷ややかな軽蔑をうかべて、立ち去るのだ。もし本当なら、作法を守らなければ』

玄関番は、カレーニンがベルを鳴らさぬうちに、いち早く戸をあけた。またの名をカピトーヌイチともいう、玄関番のペトロフは、古めかしいフロックコートに、ネクタイもしめず、スリッパばきという、奇妙な恰好をしていた。

「奥さんはどうなんだ？」

「きのう無事にご出産なさいました」

カレーニンは立ちどまり、顔色を失った。今こそ彼は、自分がどんなに強く妻の死を望んでいたかを、はっきりと悟ったのだった。

「で、具合はどうなんだ？」

コルネイが、朝の掃除の前掛け姿で、階段を駆けおりてきた。

「たいそうおわるいんでございます」彼は答えた。「きのうはお医者さまが何人もお集まりになられましたし、今も先生がお一人いらしてますんで」

「荷物を運びいれてくれ」とカレーニンは言って、やはりまだ死の見込みがあるという知らせに、何かほっとしたような気持を味わいながら、玄関のホールに入った。

ハンガーに軍人の外套がかかっていた。カレーニンはそれに目をとめて、たずねた。

「どなたが見えているんだ？」

「先生と助産婦さんと、ヴロンスキイ伯爵でございます」

カレーニンは奥に通った。

客間にはだれもいなかった。彼の足音をきいて、妻の居間から、藤色のリボンのついた室内帽をかぶった助産婦が出てきた。

彼女はカレーニンに歩みよると、死を間近にした場合のなれなれしさで、いきなり彼の手をとり、病室に連れて行った。

「ほんとにようございましたわ、おかえりになられて！のべつ旦那さまのことばかり、おっしゃっておられます

んですよ」彼女は言った。
「氷を早く持ってきてくれませんか！」病室から医者の高飛車な声が聞こえた。
カレーニンは妻の居間に入った。妻のテーブルの前の低い椅子に、ヴロンスキイが背凭れに横向きによりかかるようにしてすわり、両手で顔をおおって、泣いていた。彼は医者の声を聞いて、はじかれたように立ちあがったが、両手を顔から離すなり、カレーニンの姿に気づいた。夫を見ると、彼はすっかりうろたえ、また腰をおろして、まるでどこかに姿を消したいと望むかのように、首をすくめた。しかし、自分自身をはげまして、立ちあがると、言った。
「奥さんは危篤なんです。医者たちも、見込みはないと言っていました。僕をどうなさろうと、あなたのご自由ですが、でも、どうかここにいることをお許しになってください……もっとも、それはあなたのお心しだいですし、僕は……」
ヴロンスキイの涙を見るなり、カレーニンは、他人の苦しみを見るたびに生ずる精神的混乱に見舞われるのを感じて、顔をそむけ、相手の言葉をしまいまで聞かずに、急いで戸口に向かった。病室から、何かしゃべっているアンナの声が聞こえた。その声は生きいきと楽しそうで、抑揚がきわめてはっきりしていた。カレーニンは病室に入り、ベッドに近づいた。アンナは顔をこちらに向けて、寝ていた。頬は赤く燃え、目は光りかがやき、ネグリジェの袖口からつきでた小さな白い手が、毛布の端を丸めながら、いたずらしていた。まるで、健康で溌剌としているだけではなく、きわめて上機嫌であるようにさえ見えた。彼女は、よく透る声で、異常なくらい正確な、感情たっぷりの抑揚をつけながら、早口に話していた。
「だってアレクセイは――あたしの言ってるのは、主人の方なのよ。ほんとに、主人もあの人も、二人ともアレクセイだなんて、なんて不思議な、恐ろしい因縁かしら、そうじゃなくって？　アレクセイはあたしの頼みを断わったりしないと思うわ。あたしも忘れてしまうでしょうし、主人だって許してくれるでしょうよ……それにしても、どうしてあの人、かえってきてくれないのかしら？　主人はとっても気立てのいい人なのよ。自分がどんなに気立てのいい人間か、わかっていないんだわ。ああ！　やりきれない、気持がくさくさするわ！　早くお水をちょうだい！　あら、赤ちゃんにはそんなこと、毒よ！　そう、いいわ、でも、乳母はつけてやってね。そうね、あたしも賛成だわ。その方がかえっていいくらい。あの人がかえってらしたら、この子を見るのが辛いでしょうしね。さ、赤ちゃんを返してちょうだい」
「アンナ・アルカージェヴナ、旦那さまがおかえりにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

られましたよ。ほら、旦那さまですよ！」助産婦が、アンナの注意をカレーニンに向けさせようと努めながら、言った。

「まあ、そんな馬鹿な！」夫の姿が目に入らずに、アンナはつづけた。「ねえ、赤ちゃんを返して。嬢やをこっちへちょうだい！　あの人はまだかえってこないのよ。あなたは、あの人が許してくれるはずはないなんて、おっしゃるけど、それはあの人を知らないからよ。だれも知らないのよ。知っているのはあたしだけ。だからこそ、よけい苦しくなったの。だってね、あの人はセリョージャとそっくり同じような目をしているのよ。だから、あたし、とてもあの人の目を見ていられなくって。あら、セリョージャにお食事をさせてやったかしら？　あたしにはわかっているのよ、みんなが忘れてしまうんですもの。あの人なら、忘れたりしないのに。セリョージャを角のお部屋にうつして、マリエットにいっしょに寝てもらうように頼まなけりゃいけないわね」

ふいに彼女は身をすくめて、ひっそりとなり、まるで打たれるのを覚悟して防ごうとするかのように、おびえの色をうかべて、両手を顔にあげた。夫の姿が目に入ったのだった。

「いいえ、そうじゃないわ」彼女は口をひらいた。「あたし、あの人はこわくないの。あたしは死を恐れているのよ。アレクセイ、こっちへいらして。あたしがあわてているのは、もう時間がないからなのよ。あとわずかしか生きられないんですもの。もうすぐ熱が高くなるわ、そしたらもう何もわからなくなってしまうんですものね。今ならわかるのよ。どんなことでもわかるわ。何もかも見えますわ」

カレーニンのしかめた顔が、受難者のような表情をうかべた。彼は妻の手をとり、何か言おうとしかけたが、どうしても言えなかった。下唇がふるえていた。しかし、彼はそれでもなお心の動揺とたたかいつづけ、時たま妻を見るだけだった。そして、妻を見るたびに彼は、これまで一度として見たことのないような、感動と喜びのやさしい表情をたたえてこちらを見つめている、妻の視線にぶつかるのだった。

「待ってちょうだい、あなたは知らないのよ……ねえ、待って、待ってちょうだい……」彼女は考えをまとめようとするかのように、言葉を切った。「そうよ」彼女はまた言いだした。「そう、そうよ、そうだわ。あたしの言いたかったのは、こういうことなの。おどろかないでね。あたしは今でも、昔のままですわ……でも、あたしの中にはもう一人、別の女がいるのよ。あたし、そのもう一人の自分がこわくてならないの。その女が彼を好きになったんです。あたし、あなたを憎もうとしながら、

やっぱり昔の自分を忘れることができませんでしたわ。あれは、あたしじゃないんです。今のあたしが、本当のあたしですわ。何から何まで全部。今のあたしは、間もなく死ぬ身体です。あたし、自分が死ぬってことを知ってますもの。あの人にお聞きになってごらんなさい。今だって、もう、手にも足にも、指にも、大きな錘がついてるのを感じますもの。指だって、ほら、こんなに大きくなってしまって！　でも、こんなこともみな、もうすぐ終わるのね。あたしに必要なのは、一つだけ。ね、あなた、あたしを許してちょうだい、すっかり許して！　あたしは恐ろしい女ですわ、でも、いつだったか、婆やが言いましたわ――あなたは神聖な受難者だって。あれは何て名前でしたっけ？　あの女の方が、もっとわるいわ。ですから、あたし、ローマに行きます。あそこは砂漠でしょう、だから、あたしももう、だれの邪魔にもなりませんもの。ただ、セリョージャと赤ちゃんは、あたしが引き取ります……いいえ、やっぱりあなたは許すことなんか、できないんだわ！　あたし知ってます、あんなことを許すわけにはいきませんものね！　いや、いや、あっちへいらしって！　あなたは立派すぎるわ！」彼女は熱っぽい手でカレーニンの手をとり、もう一方の手で彼を押しのけようとしていた。

カレーニンの精神的混乱はますます強まり、今では、もはやそれと戦うのをあきらめねばならぬほどにまでなった。ふいに彼は、これまで自分が精神的混乱と見なしていたものが、むしろ反対に、このうえなく幸せな心境であり、いまだかつて経験したことのない新しい幸福を突然与えてくれたのを、感じた。生涯守りとおそうとねがっていたキリスト教の掟が、敵を許し、かつ愛するよう指示しているのだ、とは思わなかったが、しかし、彼の心を満たしたものは、敵に対する愛と寛恕の喜ばしい感情であった。彼はひざまずき、ネグリジェごしに火のように焼きつける妻の腕の関節に頭を伏せて、幼な子のように泣いた。アンナは薄くなりかけた夫の頭を抱き、身をすりよせて、不遜なほど誇らしげな表情をうかべながら、目を上にあげた。

「やっぱり来てくだすったのね、あたしにはわかっていたわ！　これで、さようならが言えるわ、さようなら、みなさん！……あら、あの人たち、また来たのね、どうして帰らないのかしら？……さ、こんな毛皮外套は全部どけてちょうだい！」

医者が彼女の両手を解いて、そっとクッションの上にのせ、肩を毛布でくるんでやった。彼女は素直に仰向けに寝て、晴ればれとした眼差で目の前を見つめていた。

「一つだけおぼえておいてね。あたしに必要だったのは、あなたのお許しだけなの。そのほかは何も要らないの

……どうして、あの人は来ないのかしら？」アンナは戸口にいるヴロンスキイの方に顔を向けて、言った。「ね、こっちにいらして、もっとそばへ！　主人に手を差しのべてちょうだい」

ヴロンスキイはベッドの端まで近づいたが、アンナを見ると、また両手で顔をおおった。

「顔から手をどけて、主人をごらんになって？　この人は聖者なのよ」彼女は言った。「さ、手をおどけなさいな、顔を見せてちょうだい！」腹立たしげに彼女は言った。「アレクセイ・アレクサンドロウィチ、この人の顔から手をどけてください！　あたし、この人の顔を見たいんです」

カレーニンはヴロンスキイの両手をとって、顔からはずさせた。その顔は、苦しみと羞恥の表情をたたえて、恐ろしいほどだった。

「彼に手を差しのべてやってちょうだい。許してやってください」

カレーニンは、涙が目からあふれるのを抑えようともせず、片手を彼に差しのべた。

「まあ、よかった、よかったわ」アンナは言いだした。「これで何ひとつ思い残すことはないわ。ただ、もうちょっと足をのばしたいんだけど。あ、そう、これでいいわ。この花はおよそ無趣味な出来栄えですわね。ちっとも菫らしくないんですもの」壁紙を指さして、彼女は言った。「ああ、苦しい！　苦しい。いったい、いつになったら終わってくれるのかしら？　モルヒネをちょうだい。先生！　モルヒネをください。ああ、苦しい、苦しいわ！」

こう言って、彼女はベッドの上をのたうちまわった。

その医者も、他の医師たちも、これは産褥熱で、百のうち九十九までは死を覚悟せねばならぬ、という見立てだった。高熱と、うわごとと、意識不明が、終日つづいた。真夜中近くなると、病人はまったく意識を失い、脈もほとんど絶えた。

いよいよだめかと思われる瞬間が、たえずあった。

ヴロンスキイはいったん家にかえったが、翌朝また様子を聞きに来た。カレーニンは玄関で彼を迎え、言った。「このまま残ってらしてください。あなたに会いたがるかもしれませんから」そして、みずから彼を妻の居間に案内した。

朝方、また興奮状態がはじまり、生気をとりもどして、思考と言葉がめまぐるしく回転したが、最後はまた意識不明におちいった。翌々日も同じことだったので、医師たちは望みがあると言いだした。その日、カレーニンはヴロンスキイの待っている居間に出てくると、ドアを堅くとざして、向かい合いにすわった。

「アレクセイ・アレクサンドロウィチ」ヴロンスキイは、いよいよ話し合いの時が迫ったのを感じながら、言った。「僕は何も申しあげられませんし、理解もできません。どうか僕を許してください！　あなたもどんなにかお辛いことでしょうが、本当のところ、僕の方がもっとやりきれない気持なんです」

彼は立ちあがろうとした。しかし、カレーニンはその手をとって、言った。

「ひとつわたしの言うことを、きいてくださいませんか。ぜひきいていただく必要があるんです。わたしに関して誤解していただかぬためにも、これまでわたしを導いてきた、そしてこれからも導いていってくれるはずの感情を、あなたに説明しておかにゃなりませんのでね。ご承知のように、わたしは離婚を決意して、その手続きさえ取りはじめていました。あなたには包み隠さずに話しますが、訴訟を起こすにあたって、わたしはずいぶんためらい、苦しんだものです。白状しますとね、あなたと妻とに復讐したい気持に、つきまとわれていたんですよ。電報をもらった時も、わたしはやはりそんな気持をいだいたまま、ここに帰ってきたんです。いや、もっとはっきり言うなら、わたしは妻の死を望んでさえいましたよ。しかし……」彼は、自分の感情を明かすべきか、明かすまいかと、思いまどいながら、しばし口をつぐんだ。

「しかし、妻を見るなり、わたしは許してやったんです。すると、許すことの喜びが、わたしに自分の義務を啓示してくれましてね。わたしはきれいさっぱりと許してやったんです。今のわたしは、もう一方の頬をも差しだしたいくらいですよ。上衣を奪われるならば、下着まで与えたい心境です。今はただ神さまに、許すという喜びをとりあげぬことだけを、祈っているんですよ！」涙が目に宿り、明るい落ちついた眼差がヴロンスキイの心を打った。「これが今のわたしの心境です。あなたはわたしを泥の中に踏みにじることもできるし、世間の笑いものにすることもできるでしょう。でも、わたしは妻を見捨てませんし、あなたに対しても非難の言葉は決して吐かないつもりですよ」彼はつづけた。「わたしの義務は、わたしにははっきりと示されているんです。わたしは妻といっしょに暮らすべきなんですし、暮らしていくつもりですよ。もし妻があなたに会いたいと望むなら、お知らせしますけれど、この場はひとまずお引きとりねがう方がいいと思います」

彼は立ちあがった。嗚咽がその言葉をとぎらせた。ヴロンスキイも立ちあがり、腰を曲げた前こごみの姿勢のまま、上目づかいにカレーニンを見つめた。彼にはカレーニンの気持がわからなかった。しかし彼は、それが何か崇高なものであり、自分の世界観などではとうてい理

解しえぬものであるのを、感じていた。

八

カレーニンとの会話のあと、ヴロンスキイはカレーニン家の表階段に出て、立ちどまり、自分が今どこにいるのか、これから徒歩なり馬車でなり、どこへ行かねばならないのかを、思いおこすのがやっとだった。自分が恥をかかされ、卑しめられた、罪深い人間であり、その屈辱をぬぐい去る可能性さえ奪われた者のように感じた。今まであれほど軽やかに昂然と歩いてきた軌道から、たたき落とされたような感じだった。あれほどしっかりしたものに思われていた、生活の習慣や規律が、ふいに何もかも、応用のきかぬまがいものであることがわかったのだ。今まではみじめな存在としか思われず、自分の幸福をたまたまさえぎっている、いささか喜劇的な邪魔者でしかなかった、欺かれた夫が、突然、ほかならぬ彼女自身によびもどされ、卑屈な気持を起こさせるほどの高みに持ちあげられたのである。しかも、その高みに現われた夫は、たちのわるい人間でもなければ、偽善的でも、滑稽でもなく、善良な、気さくな、堂々とした人間であった。ヴロンスキイはそれを感じぬわけにはいかなかった。役割がふいに入れ替わったのである。ヴロンスキイは、相手の偉さと自分の屈辱を、相手の正しさと自分の誤りを感じた。夫が悲しみのさなかにあっても寛大だったのにひきかえ、自分は偽りだらけの低級な、ちっぽけな人間であるのを感じた。しかし、これまで不当に軽蔑していた人間にくらべて、自分が実に低級だという意識も、彼の悲しみのごく小部分でしかなかった。彼が今、口では言いあらわせぬほど不幸だと自己を感じたのは、最近しだいに冷めかけていたように思っていた、アンナに対する情熱が、彼女を永久に失ったと知った今、かつてなかったほど強いものになったからだった。病気の間、アンナのあらゆる面を目にし、彼女の心を知りぬいてみると、今まで一度として彼女を本当に愛したことがなかったような気がした。それなのに今、彼女を知り、本当の意味での愛情をいだくようになった矢先に、彼女の目の前で恥辱を受け、醜態な思い出だけを彼女の心にとどめたまま、永久に彼女を失ってしまったのだ。何よりもやりきれないのは、カレーニンが恥じ入った彼の顔から両手をはずさせた時の、あの滑稽な、みっともない立場だった。彼は途方にくれたようにカレーニン家の表階段にたたずんだまま、何をなすべきか、わからずにいた。

「辻馬車をよんでまいりましょうか？」玄関番がたずねた。

「うん、頼む」

三晩徹夜したあとでわが家に帰ると、ヴロンスキイは

服もぬがずに、ソファに突っぷし、両手を組んで、頭をそれにのせた。頭が重かった。このうえなく奇妙な想像や、回想や、考えが、異常なほどめまぐるしく、ありありと、入れ代わり立ち代わりうかんできた。病人に注いでやろうとした水薬が、匙からあふれてこぼれるのが見えるかと思えば、助産婦の白い腕が目にうかんだり、ベッドの前の床にひざまずくカレーニンの奇妙な姿勢が思いだされたりするのだった。

『眠ることだ！　忘れるんだ！』疲れて眠りたくさえなれば、すぐに寝つけるのだという、健康な人間の平静な自信をいだきながら、彼は自分自身に言った。そして、事実、たちどころに頭の中が混乱しはじめ、彼は忘却の深淵に沈んでいった。無意識下の生活の波がはや頭の上にひたひたと打ちよせはじめた、と感じたとたん、だしぬけに、まるできわめて強力な電流が体内に放たれたかのように、彼はソファのスプリングの上で全身がはねあがったほど、ぎくりとふるえ、両手をつっぱって、おびえた顔で膝立ちになった。その目は、ついぞ眠りを知らぬかのように、大きく見開かれていた。つい今しがたまで感じていた頭の重さや、手足のけだるさは、消え去ってしまった。

『あなたはわたしを泥の中に踏みにじることもできるのです』というカレーニンの言葉が聞こえ、目の前にその姿が見えたのである。さらに、頬を赤くほてらせ、目をきらきらさせながら、やさしい愛情をたたえて、彼ではなく、カレーニンをじっと見つめているアンナの顔が見えた。そして、カレーニンが顔から両手をはずさせた時の、愚かしく滑稽としか思われぬ自分の姿が、まぶたに映じた。彼はまた両足をのばし、前と同じ姿勢でソファに突っぷすと、目をとじた。

『眠るんだ！　眠ることだ！』彼は心のうちで繰りかえした。しかし、目をとじてみても、あの忘れえぬ夕方、競馬の直前に会った時と同じような表情をうかべたアンナの顔が、ますますはっきりと見えてくるのだった。

「あんなことはもう存在しないんだし、これからもないんだ。彼女だって、あんなことは記憶からぬぐい去りたいとねがっているんだぞ。しかし、おれはそれがなければ生きてゆかれない。いったいどうすれば仲直りできるんだろう、どうすれば元の鞘におさまることができるんだ？」彼は声にだしてつぶやき、無意識のうちにこの言葉を繰りかえした。この言葉を繰りかえしていれば、頭の中にひしめき合っているような気がする、さまざまの面影や追憶が、新たにうかびあがってくるのを抑えられるのだった。しかし、この言葉の反覆が想像を抑えていられたのも、しばらくの間だけだった。やがてまた、最良の日々や、それと同時につい先ほどの屈辱が、異常な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb